

The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton
George Eliot の小説における gossip, rumor の働きについて (5)

The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton
On the Functions of gossip and rumor in the novels
by George Eliot (5)

嶋田 貴美子
Shimada Kimiko

キーワード : community, evil speaking, gossip, rumor, sympathy, established order,

(19)

本学紀要 28 号⁽¹⁾29 号⁽²⁾の同タイトルの論文でみてきた通り *The Sad Fortunes* の小説の舞台を成す local community で行なわれている evil speaking、すなわち gossip, rumor はこの小説の主人公である Barton 牧師自身と Barton 牧師との恋の scandal にまで発展した Czerlaski 伯爵夫人に対するものと大別される。そして彼ら二人に対するこれらの evil speaking はそれらの一つずつをつぶさにみとみると性格的にみて二種類のものがあることがわかるのである。その一つは同論文の chap. 15⁽³⁾でみたように Barton 牧師が日曜礼拝の折に会衆と気持の行き違いがあつて怒鳴つたというような明白な事実に基づいたものであり、もう一つは真偽のほどはわからないが、「こうであるらしい」という、あくまでその community の人々の推察から生み出されたものである。そしてこれらの二つの性質を持った evil speaking は George Eliot の最初の小説である *The Sad Fortunes* ですでにこのように明確な形で提示されているそのままの性格を携えつつ、*Daniel Deronda*⁽⁴⁾までの彼女のすべての小説において個人と地域性との比重での役割分担が成され、血縁地縁友情などにより強く結束していた過去の時代の地方共同体⁽⁵⁾ (local community) とそれに同化され得ない者、つまり共同体の中の既存の order と抵触するものを持つ個人との確執とを George Eliot が心酔していた「個人は己を殺して総体としての人類に従うべきものである⁽⁶⁾」という Comte⁽⁷⁾の哲学に基づいた観点から、演劇で例えるなら舞台の裏で暗躍する黒子のように多かれ少なかれその個人の運命を操る、人の力ではいかんともしがたい超自然的な力を持つものとして認識されているのである。しかし総体としての community とそれに対峙する

ものとしての個人という二項対立の中で、個人を敗北に追い込む手段としての *evil speaking* の役割は、個人と地域とのかかわり方に対する George Eliot の注目度が彼女の小説の中でも最も高いと思われるこの *The Sad Fortunes* とそれから 15 年余りに書かれた *Middlemarch*⁽⁸⁾ とではそれが担っている意味の重さにかかなりの差があるということがわかるのである。

つまり *The Sad Fortunes* の中に見られる Barton 牧師や Countess (伯爵夫人) に対する *evil speaking* は、当論文の chap. 17, chap. 18⁽⁹⁾ に見られるように地縁や友情で強く結ばれている Shepperton, Milby という地域共同体の中で持ち上がった怒りや嫉妬や不信感という極めて simple な感情に基づくものであって、その根源である彼らをその共同体から異端分子として祭り上げたいという願望から当時の地方都市で盛んであった社交の場での話題としてただ単に推量され断定された、いわゆる「作られた」gossip, rumor, scandal であったのであって、作者によって洞察された人間の深層領域にある真実の裏付がない分、強い勢力を持ち得ずに、それら自身が Countess や Barton 牧師を彼らが住む共同体から直接追い立てる力にはなり得てはいない。それに対して同様に gossip, rumor, scandal の人々に与える力の大きさを扱っている彼女の後期の作品の *Middlemarch* における gossip, rumor, scandal には地域共同体の中の異端的存在である Dorothea や Lydgate, Bulstrode を、共同体の中に暗黙のうちに作られてきた order や“地縁”という意識に照らして糾弾する意図と共に“depressed truth”⁽¹⁰⁾ (抑圧された真実) の暴露という意図が加味されて、それらは予言的な力を持ち、当論文の chap. 16⁽¹¹⁾ でみたとおり Shakespeare 劇の中の gossip や rumor と同様に、一端人々の口の端に上るや一人歩きをし始めて、その target となっている Dorothea, Lydgate, Bulstrode のその後の運命をあたかも不滅の神のように操り、彼らの身の周りにしつこくついて回って、結局は彼らを Middlemarch から追放することになるというそれほどの強大な力を潜在的に有するものとなっているのである。その意味で George Eliot の最初の小説であるこの *Sad Fortunes* の中に於けるそれら gossip, rumor, scandal の彼女の扱いは、まだまだ未熟ではあったが、ただ一つ、Barton 牧師に対するこういった女性 scandal が Barton 牧師の心情には全くの根も葉もないものであったとしても、結果として Barton 牧師は妻 Milly の死という大きな犠牲の中にその community 中における sympathy を勝ち得たのにもかかわらず、その最愛の妻の眠る Shepperton から左遷を命じられるという憂き目に合うことになり、*Middlemarch* において George Eliot が考えている地域の中にわき起った gossip, scandal の恐るべき力の片鱗がここに見られるのである。

(20)

The Sad Fortunes の主人公である Barton 牧師に対する gossip, rumor については当論文の chap. 15⁽¹²⁾ で見たように、まず Barton 牧師の父親が Dissent (非国教徒) の靴屋だそうだというものから始まる。そしてその rumor に照らし合わせて軽蔑を込めて納得される Barton 牧師の奇行や品のなさへの新たな gossip が成されるのである。しかし Barton 牧師の父親についてのこの rumor は、Barton 牧師が妻と六人もの子供がありながら極めて安い賃金で不在牧師から

一教区を預っているもはや中年にさしかかった牧師補であり、冬のさ中でも寒さをしのぐコートも持ち合わせていない程の極貧に甘んじている彼のその生活態度や、George Eliot が *The Sad Fortunes* の地の文で「足つきもよくない努力のかいもなく失敗に終るのがせきの山でまたたいの場合お金を稼ぐどころかひどい目に合うのがおちだというようなかわいそうな男⁽⁴³⁾」であると暗に示唆しているような、頭が禿げ上がりひょろりと痩せて背が高く見るからに貧相なその外見に併せて、Dissent の礼拝堂で歌われる賛美歌を日曜礼拝の時に牧師という特権を駆使して自分の会衆に強要する dogmatic なそのやり方、それまでの牧師が決してやらなかった貧しい百姓家での説教、それから無知蒙昧な農民達にはなお更理解できない堅苦しく筋の通らない説教、それから Track Society (小冊子頒布会) の創始それからまた救貧院での説教等々などから、Shepperton という世の中の近代化の流れをまだまだ認めたくない、1830 年前後の良かりし頃のイギリスの農村の人々の観念が作り出した、事実とは多分にずれている rumor であった。実際のところは彼の父親は、Dissent の教会の腕のたつ家具職人兼執事であったのである。こうした偽りの情報を含んだ rumor は当論文の chap. 18⁽⁴⁴⁾ でみたように Czerlaski 伯爵夫人のそれまでの経歴と、また彼女と同居している Bridmain 氏との関係についても成されているのである。Czerlaski 伯爵夫人と同居している Bridmain 氏との関係も実際のところは、早世した伯爵の夫人であった片親違いの妹を事業で成功し裕福な独身男性であった Bridmain 氏が面倒をみているという経歴と現在の状況とに何のやましいこともなかったのであったが、それにもかかわらずそうした gossip や scandal が彼らの周りになお更に増幅していった原因は Czerlaski 伯爵夫人が 30 歳前後の Shepperton の身分のある女性達の羨望をかきたてるような美しい衣裳を身にまとった麗人であって、一方の Bridmain 氏は自称伯爵夫人の片親違いの兄であるという真実に基づいた説明を公に与えてはいたが、彼女とは全く似ておらず一年前から Milby の立派な屋敷を借りて伯爵夫人と共に住み、伯爵夫人の Milby ではとびきり目立つ派手な生活を献身的に支えているという事情が地縁、友情で強く結束されたその共同体の人々の心に反発と不審感とを生み、その中で事実が歪曲され「簡単な事実」ではあきたらずそこに「何かもっとおもしろいことがあるに違いないと思う」⁽⁴⁵⁾ gossip 好きの当時の人々の興寄心を刺激したのであった。つまり自分自身己の体に流れている血はとでもすぐれた質のものであると自負している血筋 (blood) 信奉者である Shepperton の町の地主 Fauquhar 氏が、Milby の町の住人なのに Shepperton の Barton 牧師の説教をききに來る Czerlaski 伯爵夫人について「教会に入って來るや辺りを見回したり、注意を引くような⁽⁴⁶⁾」派手な身なりをしたりするがあれはやはり自称兄さんと言っているあの「Bridmain 氏にあきた」からで「家族となるのもっとふさわしい他の兄さんを探している⁽⁴⁶⁾」のだととんでもない当て推量に断言を与えたり、chap. 18⁽⁴⁷⁾ の引用文の中に見られるように銀行家の妻の Phipps 夫人と弁護士の子の妻の Lander 夫人などがしたように、Milby や Shepperton の人々の間では Bridmain 氏は伯爵夫人の兄ではないのではないかという仮定に根ざしたきわどい rumor や scandal が成されその基準から彼らをその共同体から排除しようとするのである。このように新参者でありそれまでとは一風変わった牧師である Barton 氏への gossip や、Czerlaski 伯爵夫人と Bridmain 氏への gossip, scandal は *Middlemarch* の小説

に見られるように 1830 年前後の地域共同体の土着の人々の最高の価値感が、伯爵夫人をここここで糾弾している Fauquhar 氏が自ら自負しているように、血筋が全うであることを、つまり先祖代々 honest man であり gentleman であり、更にその血筋に何の汚点もなく清廉潔白であることにあり、そしてまたその中でこそ培われその地域をしっかりと統率してきた established order に生き方が抵触しないということに置かれていたのであって、Barton 牧師も含めた伯爵夫人、Bridmain 氏の彼ら全員に対する gossip, rumor, scandal は、彼らが村に移住してきたばかりで“地縁”がうすいという村落共同体で生きるためには最大のマイナス要因をかかえていた上に、彼らの不透明な血筋や個人的な歴史あるいは考え方が地域の住民にうさん臭さとなって映り、それへの嫌悪感を込めて推量された事実が地域の中にある established order に抵触したことから起ったものであったのである。

また Barton 牧師に対しては彼の説く目新しい Evangelicalism の doctrine やまた社会の中の悲惨で貧しい生活をしている者達に対する牧師の役割を遂行しようとする新しい姿勢、そして彼自身の極貧ぶりをさらけ出している生活等々が「貧しさは悪徳の印¹⁰⁸」とするその community の人々の心理的な established order を脅かすものとなっているのではあるが、それとは別に対外的には彼はれっきとしたその教区の牧師であって、いやしくも gentleman 階級に属しその community の精神界においては絶対的な力を有していて決してないがしろにはできない存在なのであったことから、そうした Barton 氏の牧師としてのやり方に不満を持ちながらも地主の Fauquhar 氏をはじめ町の裕福な人々は Barton 牧師一家とある程度の親交を持ち子だくさんの Barton 一家を何くれとなく助けざるを得なかったのであったが、Barton 自身は持ち前の頑固さと精神的な鈍感さから、その community の意志を汲み取るなどおおよそなく、牧師という仕事の神髄は community の人々との良好な人間関係にあることも知らずして、自己のやり方をあくまで貫き通したことへの反感がこのような gossip や rumor や scandal と言った現象を引き起こし彼の立場をますます孤立化させたのであった。一方 Czerlaski 伯爵夫人は Milby の町に居を構えたのは、自分が伯爵夫人という社会的に status の高い地位¹⁰⁹に着いてみて得たある哲学、つまりそういった称号などよりはもっと堅固なものが生活の中にはあるのだという考え方から、妹の美貌と貴族の称号の反射光に浴することをこの上なく喜び妹の言いなりに彼女と共にあちらこちらと渡り歩く生活を送ることに満足している兄の Bridmain をいいことに、「隣人同志がそれぞれの者の持っている諸事情をすっかり知り尽くしている¹¹⁰」所に住んでみようと思ひ立ち、一年ほど前に Milby を訪ね当たったという事情によるものであったが、25 歳そこそこで結婚した夫の Czerlaski 伯爵との七年間にわたる申し分のない幸せな結婚生活の間に夫に伴って訪れた Paris や Germany で現地のの上流階級にある人々との接触から熟知している世の中の概念と、Milby や Shepperton のような華やかなことはほとんどない農村の、その local community にある世の中というものの概念とは全く異なったものであることを今さらに知ったのであった。Milby や Shepperton の町においては、類まれな麗人である上に派手な装いに事欠くことのない極めて目立つ婦人の存在は、それだけでもその閉鎖的な狭い地域共同体の人々には受け入れがたいものであったのであり、人々は何かにつけて夫人と自分達との間に隔たりを設けまた彼

女の存在を無視しようとしたのである。そして結局そこに居を構えたことが間違いであったと思いはじめた伯爵夫人の立場は、牧師としての才能のなさやそれに付随した性格的失陥により地域の者達や同じ牧師仲間の中に冷笑や時には嘲笑などを呼び起こし、会衆の中にも教区牧師としての真の尊敬を勝ち得ることがなかった Barton 牧師の立場とは、そうした村の人々の偏見に共にさらされているということと共に逆にまた、そうした古い農村の地縁や旧弊な established order から解き放たかかれている新参者であるという共通点を持ち、彼らは共に地域の異端分子としてすでに最初から互いに理解し合える心理的な素地を持っていたのであった。そして Barton 牧師夫妻は、宗教的な事柄に強く関心を持ち Milby の町からわざわざ Shepperton に Barton 牧師の説教をききに來てはその説教を神学的に高く評価している伯爵夫人の食事の招きを快く受け、彼女と Bridmain 氏の住む豪華な Camp Villa をしばしば訪ねて、町の誰もがそれを拒否する伯爵夫人と Bridmain 氏との交誼を更に深めていったのである。そして「単純な事実ではあきたらずもっとわくわくするような話に作り変えてしまう⁶⁵⁾」Milby の人々は先にも見たように Bridmain 氏は伯爵夫人の兄ではないのではないかという邪推がすでに兄ではないという断定に変わって、Milby や Shepperton の住民の男達の間ではそうであるのに周囲の目をごまかさざるを得ない彼らの身辺に漂う、その住民達が最も嫌ううさん臭さに彼らは全く信用のおけない者達であるから近づくべからずという暗黙の了解が成されたのであり、また女達はそのような伯爵夫人の不道徳性を糾弾することに加えて、伯爵夫人自らが評しているように「女性はほとんどみんな身なりがぞんざいで容姿も醜い⁶⁶⁾」Milby の町の女性にとっては目立たずにはいない伯爵夫人の美貌や美しい装いに対する嫉妬からすでに sensational な gossip を流していたのであったが、当の伯爵夫人と Barton 牧師とのこのような接近に、村の者達は男も女も総じて更に sensational な gossip を期待したのであった。

(21)

Barton 牧師が Shepperton の教区民に反感を抱かせるような事態を招くことは度々あったとしてもなかなか受け入れられることのなかった理由は、当論文の chap. 19 でみたように一般的な工場労働者や農民などの知的 level の低い人々にも理解できるような説教を行なうという基本的な牧師の才能に彼が欠けている上に dogmatic で精神的指導者としての sympathy や generosity が欠けているということのほかにもそういう人にありがちな common-sense が磨かれていないという彼の人間的な欠陥にあった。このような体質的な性格的な側面は Barton 牧師のようにはや 40 歳を過ぎた年齢に達した人にとっては将来的にみてよほどのことがない限りより深化こそすれ改善されることはない。年収 80 pounds⁶⁷⁾ という奉給で自らも gentry 階級⁶⁸⁾にある牧師としての体裁を保ちそしてまた 6 人もの子供達の食べ物と衣服の賄いをしなくてはならず、そしてその家計を預る妻の Milly のやりくりの才を作者自身驚きの目でながめていたのであったが、その Barton 一家の家計の最近の逼迫もある意味では Barton 氏の頑な dogmatic な性格から持たされたものであったのだ。つまり Barton 氏は、一年ほど前 Barton 氏と Milly

との結婚後まもなくして同居するようになって Milly の家の「戸口から狼²⁴⁾を寄せつけなかった²⁵⁾」ほど裕福だった Milly の伯母の Jackson 老嬢と口論し、その伯母の逆鱗に触れ、伯母は Barton 一家の許を去り、自分の持っていた家具も毎年支払われていた収入もみんなもう一人の姪の所に引き上げてしまったのであった。その家計の逼迫は伯母が去って一年後の今ますます募ってきて、Shepperton の教区民に「自分達が牧師に精神的な援助を必要としている以上にあの牧師は自分達からの物質的な援助を必要としているのだ²⁶⁾」という強い意識を植えつけることになり教区の精神的指導者として邁進すべき教区牧師としての Barton 氏の地位を更に失墜させたのであった。そんな折に Milly が大病したのもその極度の貧しさによる過労がたたったものであったに違いない。そしてその Milly の大病は、Milly 自身の看護とまだ小さな子供達の世話のために Barton 一家の maid の Nunny だけでは追いつかずその他に更にもう一人の charwoman (雑役婦) を顧わねばならず家計をますます追いつめることになったのであったが、一方でこの不幸なでき事は Barton 氏一家と近隣の人々との間の垣根を幾分低くする役目を果たすことになったのであり、やがて来るべきその垣根の全面撤去の伏線ともなっているのである。しかしその Shepperton の教区民と Barton 牧師の間の barrier が完全に取り除かれるためには Barton 牧師にとっては最大の sad fortune を経験しなければならなかった。その Barton 氏の sad fortune を招来した直接の原因となったのが Czerlaski 伯爵夫人であったのだ。

伯爵夫人は Milly の病気に際して親しい友人としてしばしば Milly を訪ね、持ち前の華やかな貴族的な雰囲気をも Milly の bed の側に持ち込んで、そうしたものに共に憧憬を抱いている Milly と Barton 氏の沈みがちな気持を高揚させる役割は果たしたものの、Mrs Hackit や Mrs Fauquhar のように6人の子供達のうちの何人かを自宅に引き取り世話をするとか、または貧しさの極みにあった衰弱した Milly の体に滋養となるものを届けたりというような援助は全くしなかった。これについて George Eliot は「地位のある贅沢な暮らしに慣れた婦人に貧しさの子細を知ってもらうことは無理である²⁷⁾」と言っているのであるが、この Barton 夫妻の上流階級好みとそれに伯爵夫人の貧しさということへの無知という二つのことがついには Milly の死というとんでもない事態を引き起こしてしまったのである。

Milly はまだ動ける状態にはないという Hackit 夫人の目はごまかせなかったが、それでも2～3週間後には元のように働けるようになり一応危機は脱したかに見えた。しかし更にその2～3ヶ月後伯爵夫人の住む Camp Villa に大きな異変が起ったのである。これまで見てきた通り、伯爵夫人の考えを全面的に支持し夫人のやりたいことをすべて容認してきた片親違いの兄の Bridmain 氏がまさに突然に伯爵夫人のそれまでの maid との結婚を宣言したのである。それはその後はその maid が実質的には自分の主となることを意味するものであり、その屈辱に逆上した伯爵夫人が Bridmain 氏の許を飛び出して Barton 氏の牧師館に馬車一ぱいの家具もろとも移住することになったのである。伯爵夫人はその派手な暮らしぶり伯爵という貴族の地位にあることから判断されるほどの自らの収入は実際にはなくて、年収の 60 pounds ばかりでは自らを養うにも足りず、それまでは年収 500 pounds という Bridmain の援助に頼って生活してきたのであり、その兄の許を去る時に 20 pounds だけは持って来てはいたものの、長年の贅沢

三昧に慣れ家計のことなどほとんど念頭に登らせたこともない伯爵夫人には世話になる Barton 家の家計どころか自分自身が置かれている経済的な窮状に対する客観的な認識もほとんどない。そもそも Bridmain 氏がその妹の maid と結婚すると言い出し彼女を怒らせ家を飛び出すはめに到らせたのも、彼女の優雅な身じたくや金のかかる maid への支払いが Bridmain 氏の家計をも押し始めていたという当時の状況からすれば、それはある意味では Bridmain 氏の内々暖めていた計画であって、それまで住んでいた Milby の町の豪華な Camp Villa をその maid と共に間もなく立ち去った Bridmain 氏の謝罪と和解の日を待っている、そうした事情に全く疎い伯爵夫人のその熱い願望はよけいに空しく哀れに見える。しかしその願望を胸に伯爵夫人は Barton 氏の牧師館でもただ一人勝手気ままに優雅に暮らしていたのである。そうした Barton 氏一家に与える経済的なかつまた一人手のかかるぜいたくな客がいるという心理的な負担もさることながら、伯爵夫人と彼女が持ち込んだ家具とで 2 間を要した Barton 家の以後の住まいの状況は、Barton 夫妻と 6 人の子供達の生活の場としては、それでもなくとも十分広いとはとうてい言えない状況にあったその家をさらに手狭にして、家族の各々の者にはもとより、その家の女主である Milly に大きな stress を与えることになったのであった。しかしこの *The Sad Fortunes* の第一章で Hackit 夫人が言っているように「性格的にもやさしい Madonnna のような女性」であった Milly はその不満を口に出すことは一切ないし、Milly の心の中には自分の夫の Barton 氏の立場と同様に地域の中できこえてくるいわれなき gossip のやり玉に上っているその伯爵夫人への心からの同情が、夫に対する尊敬の気持故に常に宿っていたのである²⁸⁾。Milly にとっての伯爵夫人はまた、その地域の中では全く勝ち得ていない Barton 牧師への尊敬の気持を自分と分かち合い、経済的な援助とは別のところで、Barton 氏と Milly の相方への変らぬ深い友情を常に示してくれている大切な女性であったのであり、そういう都市型の彼女との関係は Shepperton という地域共同体の地縁という概念で築かれつつある Hackit 夫人や Fauquhar 夫人などの土着の人々との関係とは別の類のものであって、それはそれで Barton 夫妻には大切なものであったのである。そしてその countess は何はともあれ美しい装いに憧れを抱いている Milly の頭上にきらきらと輝いている永遠の star なのであった。

このように大きな負の要因とそして小さなプラスの要因を含みながら始まった伯爵夫人の Barton 氏一家の住むこの牧師館への滞在は一・二ヵ月ほどするうちに Milly の最初の病気で築かれ始めたその community との地縁という絆を再び断ち切ることになり当の伯爵夫人と Milly と Barton 氏を共に巻きこむ gossip や色恋の scandal まで引き起こす結果になってしまったのであった。Milly の病気の折にはとても親切に見舞ってくれたり、彼女の夫も教会委員として Barton 牧師の意向に一定の理解を示し新教会の建設に尽力している Hackit 夫人、それに Barton 牧師には最初から好感を持っていなかった Patten 夫人、そしてまた Patten 夫人の姪である Gibbs 嬢、そこから Pilgrim 医師は伯爵夫人の牧師館への逗留について次のように言っている。ここには Shepperton の地域共同体の中の地縁とはどういうものであるかということと共に Barton 夫妻が再びそれを失う様子が描かれている。

Hackit 夫人 「全くねえ、こんな恥ずかしいことってありませんよ。私はあの奥さんに免じて Barton さんをできるだけと思って支えて来たのですよ。でもあんなことを平気でさせているなんてもう黙って見ちゃいられません。あの女が日曜礼拝に彼らと連れだって来るのを見るなんて全く不愉快ですわ。もし夫が教会委員でなかったら、私は Knebly 教会に行っていたでしょうよ。そう思っている教区民は多いですよ。」

Pilgrim 医師 「私は Barton さんはいつだってただの阿呆だと思っていましたよ。…あの婦人達が初めてここに来た時から Barton さんはあの人たちからつけ込まれていいようにされてきたのだと思います。でももうそれはだめですよ。」

Hackit 夫人 「雀が枝に止まるように兄とやら言う人と Milby にやって来て、そして突然その兄さんが一人で勝手にどっかに行ってしまうとあの人は Barton さんのところどころがこむ。とは言ってもどうしてまた妻と子供達を養うことさえ十分にできないあんなやせこけた牧師のところになど行く気になったかってことは神様以外に誰も御存知ないことですよ。」

Pilgrim 医師 「Barton さんには私らがわからないような女の気を引く何かがあるんでしょう。伯爵夫人は今自分付きの maid がいませんから Barton さんが便利に使われて彼女の boots のひもを結んだり、そんなような身じたくを手伝っているそうですよ。」

Hackit 夫人 「……だのにねえ奥さんはと言えば身を粉にして子供達のための縫い物をしているんです。それにもうじきもう一人生まれて来るんですよ。どうやってそれを切り抜けて行くのかしら。あの人のことを見捨てるのは忍びがたいですわ。でもねえ、それに甘んじているようじゃあの方にも非があるんです。」

Pilgrim 医師 「……Fauquhar さんのところではああいういかがわしい者が彼女と共にいる限り、あの奥さんをお招きすることは断じてないとのことだ。」

Miss Gibbs 嬢 「もし私が誰かの奥さんの立場に立ったら Barton 夫人がなさっているような辛抱は断じてできっこありませんよ。」

Hackit 夫人 「一体全体 Barton 一家はどうやって帳尻を合わせているのでしょうかねえ。だって Barton さんがある牧師慈善団体からお金をもらっていることは分かり切ったことなのですよ。あの婦人は最初は司教区尚書院長や自分のこれと思われる友人に手紙を書いて彼にちゃんとした聖職の地位をもらってやるだとかそういうようなことをわんさと Barton さんに吹き込んだってということなのですよ。でも何が本当で何が嘘なのかからつきしわかりやしません。いつだったか、私がちょっと言ってやったもんですから Barton さんは今では私の家には寄りつきやしません。多分自分のことが恥ずかしいんでしょう。日曜日の礼拝の時の姿はひどくやせて疲れ切っているように見えます。」

Pilgrim 医師 「そうだよ、彼は到る所で悪い評判がたっていることに気がついたに違いない。牧師さん達もあの人愚行に全くあいそを尽かしてしまっているんだ。人の話では Carpe さんなどはできることなら Barton さんから牧師補の職を取り上げたいと思っているようだ。でも彼が自分自身 Shepperton に来るつもりでなければそれはできないことなのだ。Barton さんはちゃんと免許のある牧師補なのだからねえ。……²⁹⁾」

そしてまたこの Patten 夫人の会話の場面のあと作者は今度は Milby の Vicarage³⁰⁾で行なわれた牧師会での、欠席した Barton 氏を除く 7 人の牧師による Barton 牧師に対する gossip を紹介している。男女の scandal でかつて自らの評判を落した curate³¹⁾の話から伯爵夫人と Barton 氏の scandal に移っているのである。

Fellowes 牧師 「scandal と言えば、Barton 君の最近の話をきいていますかねえ。先日の Nisbett の話では彼は 6 時に伯爵夫人と二人だけで食事を取り、一方彼の奥さんは料理人のように振る舞って台所で食事をとるのだそうですよ。」

Ely 牧師 「Nisbett の言うことじゃちょっとあやしいもんだけどな」

……

Archibald 牧師 「二人だけで食事をとることぐらいがその問題のせきの山であってほしいものですねえ。」

Fellowes 牧師 「Barton 君はきっとこの世で最も偉大なまぬけか、それとも何かひそかにうまいものを持っているのですよ。美しい女性の目に自分を魅力的に見せる媚薬のようなそんなものをねえ。……」

Ely 牧師 「あの御夫人はそもそもの初めから Barton 君を口説き落していたようですね。……」

Duke 牧師 「私は思うんですが私達の誰かが Barton 君が引き起こしているこの scandal のことで、忠告すべきだとねえ。あの人は自分の魂ばかりか会衆の魂までも危険にさらしているのですから。」

Cleves 牧師 「事の真相がちゃんと解りさえすれば、この事の全容は意外に簡単に説明がつくかもしれません。私はいつも Barton 君は正義感のある人だという印象を受けてきました。あの人のやり方が誤解を生みがちなのですよ。」

Fellowes 牧師 「でも何と言おうと私は Barton 君が根から嫌いです。彼は紳士ではありません。全くあの人はつい先だって亡くなったあのもったいぶった Prior とかなり親しくしていました。あの浴びるほど酒を飲み鼻をまっ赤にして Gospele⁸³を語っていたあの人はですよ。」

Ely 牧師 「伯爵夫人はそれよりもましな嗜みを与えたという訳ですね。」

Cleves 牧師 「あの人は少ない収入で大家族を抱え一生懸命頑張って暮らしていかなくゃならないかわいそうな人ですね。あの伯爵夫人が暮し向きをよくするために何かしてやればよいのですがねえ。」

Duke 牧師 「ああ、あの人はだめですな。Barton 君のところでは以前よりずっと貧しくなった様子が見えますから。」

The Sad Fortunes の第一章ですで見られる Barton 牧師に対する激しい gossip の場面については当論文の chap. 15 ですすでに検証したとおりであるが、それから9ヶ月後 Hackit 氏を除くその同じメンバーによって、これもまた Patten 夫人の家で再び噴出した Barton 氏への evil speaking は、その最初のものよりもはるかにひどい内容を含んだものとなっている。chap. 1 の中に見られる最初の gossip は、Barton 牧師が教区民の耳にまだじっくり来ていない Evangelical の教義に徹し、その上その説教の才が乏しくて話がわかりにくく、また日曜礼拝の運営方法においても彼の dogmatic なやり方が教区民達の間には大きな反感を生じさせたことから噴き出したものであったが、それでも教区民の中にはある一定の理解を示すものもあって、Barton 牧師に対しては *Scenes of Clerical Life* の中の3番目の小説である *Janet's Repentance*⁸³ の話に登場する Evangelical の Tryan 牧師の場合のような Shepperton の町からの排斥運動にまでは到っておらず、むしろ頭は禿げ上がり痩せて背が高く見るからに貧相な様子のその Barton 牧師と美しく性格もすばらしい Madonna のような女性である妻の Milly との取り合わせ、そしてまた6人もの子持ちという大家族でありながら年80 poundの奉給しか受け取っていないことに対してそこに集っている人々は、内心感じている Barton 牧師への不満や怒りとは別に、Barton 牧師への sympathy を感じる者もあったのである。しかし第一章の Patten 夫人のところでのお茶会に集っている面々がその local community の多様な立場にある者のそれぞれを代表する者であって彼らの語ることが即ち Shepperton や Milby の町の人々の声であり、従ってその場面での Barton 牧師への gossip の中には教区民の Barton 氏に対する率直な思いが述べられていると同様に、この場面にも於てもその構成要員がほぼ同じであることを考えるとここで話され

ている Barton 牧師に対する evil speaking は Shepperton とその隣の Milby の町の住民達のすべての者の間で成されている gossip や scandal であると言えよう。そして最初の時は Barton 牧師に好意も覗かせ彼の妻の Milly には「非の打ちどころのない女性」と最高の讃辞を送り、全面的に Barton 牧師を憎悪し批判していた Patten 夫人や Pilgrim 医師等とはその半面で異なる立場をとっていた Hackit 夫人が、今度こそは Barton 氏ばかりかその妻の Milly にまで怒りの矛先を向けているのを見ると、伯爵夫人との親交に対することで Shepperton や Milby における Barton 氏夫妻を target にした gossip や scandal の激しさを推し量ることができるというものである。

Patten 夫人の所で再燃した Barton 牧師にまつわるこの evil speaking はまず Barton 氏自身が実際に教区民から多くの物質的な援助を受け更に牧師救済基金 (clerical charity) から金銭的な援助を受けざるを得ないほど貧しいのにもかかわらず大変な散財にこそなれ何の得もない伯爵夫人の長逗留を許している Barton 氏に対するものと大病した後にもかかわらず6人の子供の衣服の繕い物や世話を身を粉にして働かなければならない上に更にもうじきもう一人が生まれるという身でありながら夫の言いなりにその情況に甘んじている彼の妻の Milly の、もはや同情の余地のない周囲への対し方と、それにもう一つ、伯爵夫人の身の周りに漂ううさん臭さ、つまり Shepperton や Milby の local community が最も嫌う不正や不道德性の香りと共に、それまで伯爵夫人が住んでいた Camp Villa とは比べ物にならないほどみすぼらしい Barton 一家の住む牧師館への彼女の不可解な長逗留から推察される伯爵夫人と Barton 牧師との色恋の scandal との、3つの骨子を含んでいる。このようにその local community 全体に広がってしまった gossip や scandal が当の人々の立場にどのような影響を与えるかと言えば、牧師館に伯爵夫人が滞在している限り、Barton 一家のつましい賄いを助ける community からの物質的な援助はなくなるであろうし、また Hackit 夫人が言っているように教区民の Barton 牧師からの心理的な離反があり、それから Milly に対してもそのぎりぎりの家計の中で6人の子供の衣食の世話とそれからまもなく生まれてくるもう一人の子供の出産準備に身を粉にして働かなければならない上に更にこの伯爵夫人を同居人としているそのやり方に周囲の者達はもはや同情の余地はないし、Milly の身に何かあったとしてもかつて Milly が病気をした折に地域の人々から受けたような暖かい見舞や援助は期待できず、また Pilgrim 医師が Fauquhar 夫人の言葉として言っているように地域の誰からもお茶に招かれることはなくなってしまうのである。このお茶に招かれなくなるということはお互いが何の楽しみもなかったこの時代においては、ちょうどこの執筆時作者の George Eliot 自身妻子ある Lewis との同棲が引き起こした gossip や rumor やまた scandal のために誰からもお茶に招かれず隠遁生活を余儀なくされそれがもたらす寂しさと悲しみを感じていた状況にあったことを考えれば、Milly ばかりか Barton 氏にとってもかなりつらく厳しい試練であったに違いない。それから先の Patten 夫人の家での場面の次に引用してある牧師会の場面でも牧師の起すそうした女性 scandal が、当の牧師自身と彼の教区民にどれだけ深刻な意味合いを持つものであるかということが述べられているのであるが、Pilgrim 医師が言っている、「牧師さん達もあの人の愚行に全くあいそを尽かしてしまっているんだ。…

Carpe⁶⁵さんなどは Barton さんから牧師補の職を取り上げたがっているらしい」という言葉は、Barton 牧師がその不在教区師師である Carpe 氏の代りに Shepperton に来たという事情がある限り、そうした scandal に対していくら Barton 氏自身が我が身に証明できるものとして無視しようとし、そのようなあらぬ scandal にうつつをぬかす人々を憤りまた侮蔑することで自己を納得させたとしても、対外的にはその scandal は Barton 牧師の将来にも深刻な影響を及ぼしかねないゆゆしきものであったのだ。

(21)

先にも述べたような Barton 氏の窮乏と妻の Milly の気がかりな健康状態、それに老朽化している上に手狭な牧師館、そしてもうじき新しい一員が加わって家族が9人にもふくれ上らんとしている Barton 家の事情、それらもろもろの negative な要因をもものとしめない貴族である伯爵夫人の参入とそして何ヶ月にも及ぶ彼女の長逗留、これらの明らかな事実から推察される Barton 家の状況は誰の目にも異常に映るものであったが、特にすでに見てきたとおり正義に対する潔癖な意識が強く、不自然な理解しがたいいわゆるいかがわしい (objectionable) ことに対してだけでも激しい不快感を持つ上に、当論文の chap. 19 で見たように単なる「事実だけではあきたらず、もっとわくわくするように事実を作り変えてしまう」1830年初期の Milby などの古い農村社会の人々が、Barton 一家に起っているこうした不可解な事実を更に脚色し、お茶の席に格好の話題として上らせ、あるいはおもしろい gossip として人から人へと町の隅々まで伝播させていったことは容易に理解できる。しかしここでの evil speaking の内容は、単なる不可解な事実からの当て推量によって全く根拠を持たない「作られた」ものであったにもかかわらず、まさに以前その地域の人々が伯爵夫人と共に暮らしていた Brimain 氏について彼らが余り似ていないとの理由で事実を歪曲化し二人が公言しているような兄妹ではないのではないかという推量から「兄妹ではない」という断定を作り出し、それに基づいて考えられる彼女の非道徳性を憎悪し巷の gossip はもとより実行使として彼女の存在を認めようとはせず事実上地域社会から彼女を締め出した状態に彼女を追い込んだのと同様な力を有し、勝手気ままに「どこに住んでも構わない」気楽な境涯にある伯爵夫人とは異なり、そこに住みついて教区の人々の精神的指導者となるべき教区牧師という Barton 氏の社会的な立場からすれば、極めて危険な状態に彼を追い込むことにもなりかねない恐ろしいものであったのである。特に当時は牧師の女性 scandal は牧師にとって致命的な不評を買うものであったのだ。Barton 氏自身このような scandal が自分の教区民の間ばかりか Shepperton や Milby の町全体に流されていることは知っていたが、自らの潔白への自信とそのような無実の scandal にうつつをぬかしている低俗な人々と自分を同列に置けるほどの思考の柔軟さを持ち得ていないことからそれを唾棄すべきこととして侮蔑の念を抱きこそすれ、その scandal を取り消す努力は全くしていない。これは Barton 氏とその田舎町の教区牧師になってまだ2年余りで Shepperton や Milby のような local community においては例え事実無根の「作り話」であってもそこに取り込まれた者の運命に対

しては大きな作用を及ぼす力を持っているものなのだという認識が欠けていたことによるものであったのである。こうした状況は Milly も同じであり³⁶⁾、伯爵夫人に対する「いかがわしい人」であるから「つき合わない」という地域の人々の概念からも Barton 氏と同様に解き放たれていたのである。そのような伯爵夫人に対する処遇のし方が地域社会の反感を招き、大病して窮地に陥った当の Milly ばかりか Barton 氏もまた社会から離反され、そして又子供達も含めた Barton 一家を援助しそして急場を救うという行為を通じて地域社会の間にやっと芽ばえ始めた友好の絆は Barton 夫妻もろとも新たな gossip に巻き込まれることによって再び断ち切られてしまうのである。

伯爵夫人の牧師館への長逗留について Barton 氏自身は、常識と世事に疎い独善的な学者肌であるその性格から、伯爵夫人の以前から全く変らない彼一家に対する親切な言動に感謝こそすれその為の家計の逼迫も Milly の肩にかかっている余分な仕事の重荷についてもそれほど深刻には受け止めずに自分の思う正義だけにつき従っていく態度を貫いていたのであったが、伯爵夫人の牧師館への滞在が半年ほどにもなるとそのことに対する Milly の堪忍もとうとう限界に達したばかりかそのことがとうとう Milly の健康を再び押し始めたのであった。時期を同じくして牧師館での貧しい暮らしにあきてきた伯爵夫人が兄の Bridmain 氏との暮らしに再び意欲を持ち始めたことと、Milly を殊の他敬愛している家政婦の Nanny の、Milly の身を案じるが故の、伯爵夫人と夫人の犬の Jet への嫌悪感が遂に爆発したこととの事情が重なって、伯爵夫人の牧師館への長逗留は半年ほどでやっと終止符が打たれたのであったが、Milly の健康への傷手は出産を間近に控えているという条件とも重なって深刻さを増していき、伯爵夫人が立ち去って6週間ほどして迎えた早産で Milly はあっけなく赤ん坊もろとも亡くなってしまったのである。そうして初めて Barton 氏は Milly への思いやりのなかった自分の過去を悔やみ嘆くと共に欠けがえのない愛を失くしたことがどんなに大きな悲しみを持たらすものであるかということを知ることになる。そして誰かの助けなしには生きていけない自分の弱さを初めて知って途方に暮れていた彼は、伯爵夫人との scandal の折に牧師仲間の中でも Barton 氏へのそれほど厳しい目は向けなかった Cleves 牧師の暖かい支えを皮切りに、町の裕福な人々や他の牧師仲間が経済的に危機に瀕している Barton 氏を救うためにまとまった金を送ったことや、そしてまた地域の婦人達が残された10歳の Patty を頭にその後5人もが続いている幼い子供達の教育や世話を買って出て不慣れな子育てから Barton 氏を解放したことなど、次々に差し出された地域の人々の温情に接して、Shepperton における教区牧師としての活力を新しく蘇らせたのである。伯爵夫人が牧師館を立ち去った後もなかなか消えることのなかった scandal によって Barton 牧師の周囲について回っていた地域の人達の嫌悪感や不信感は、Barton 牧師が、まだ若く美しい最愛の妻の Milly の死という傷ましいでき事を経験してやっと浄化されて人々の sympathy を勝ち得たのであった。しかし当論文の chap. 19 でも述べたことではあるがその伯爵夫人との間の scandal は、chap. 20 の引用文の Pilgrim 医師の言葉にその伏線があるように、Shepperton のもともと教区牧師である Vicar Carpe 氏の不興を買い、遂に Barton 氏は、悲しく辛いでき事を通して住民達との間にやっと生まれた「愛の泉」である sympathy の心理的な絆を断ち切っ

てそこを立ち去ることを余儀なくされるという新しい Sad Fortunes に向き合わなければならなくなるのである。

このように Barton 氏は、“地縁”ということによって友好関係を築き互いに有機的に強く結びつき合っている local community のその本質を全く理解せず、経済的な逼迫から community の援助を受けているにもかかわらず、世事に疎く頑で、自分独自の正義感に基づく独善的な姿勢に固執したのであり、そのことが彼と community との間に摩擦を生じ、その community の Barton 氏への反発が gossip, rumor, scandal となって Barton 氏を徹底的に攻撃したのである。こうした Barton 氏の一人よがりの生き方は、先にも述べたように George Eliot が心酔していた Conte が言うように、個人は総体（つまりここでは Shepperton あるいは Milby の local community）の一部である以上、己を殺して総体である community に従わねばならないという社会学的な考え方からすれば、Shepperton や Milby のような古いイギリスの local community の真髓とも言える established order に抵触するものであったばかりではなく、作者によって深く考えられた哲学的真実に反するものであって、彼の人生にもたらされた Sad Fortunes はそうした彼の生き方への punishment であり、George Eliot が思い上った人間にしばしば持たらす Nemesis³⁷⁾でもあったのである。しかし Barton 牧師は教区牧師となり gentry 階級に参入したその立場から来る思い上がりは多少あったとは言え、実際には生真面目で仕事熱心な堅物であって、恋の経験は一度もなかったのに、その彼の周りにわいた Countess とのこの scandal は、“地縁”で強く結ばれ平和で安定した暮らしをしてきたその地域に、近年入り込んできた Barton, Milly, Countess の三人が持たらしめた、地域の人々から見れば非常に奇異に見えるその事態に対して、何らかの解答を与えようとして、地域の人々が日常の社交の場にしていたお茶の席での格好な話題となり、空想を巡らし半ば共通の嫌悪感に基づく entertainment の要素から「作り上げられた」不実のものであり、それゆえ George Eliot 自身が *The Sad Fortunes* の chap. 7 で言っているように、「平然としていたら克服できるかもしれない³⁸⁾」程度の力しか持ち得ないものであったのだ。つまり Barton 牧師の scandal は、地域の人々によって「うさん臭い」とか「いかがわしい」とか思われていた Countess 故の、Barton 牧師の意識のおよそ及ばない所で持ち上がったものであり、そういう意味では、*Middlemarch* において、生活態度がいかにも偽善的で、うさん臭く「彼の父や祖父はいったいどんな人であったか知りたい⁴⁰⁾」と思わせるような、友情地縁で強く結ばれた *Middlemarch* の人々の中では浮き上がった存在で不審感嫌悪感からすでに gossip, rumor がつきまとっていた裕福な銀行家 Bulstrode が提示する好条件を何の疑いもなく受け入れ、自分の医学への情熱のままに邁進していた Lydgate が知らぬ間に陥っていた money scandal と gradation はあるものの形態的にはかなり似通ったものであるといえる。つまり *The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton* の中での Czerlaski 伯爵夫人そして Barton 牧師の Shepperton や Milby という local community との対立と、その状況の中で起こる gossip, rumor, scandal の取り扱い方は、George Eliot のその最初の小説である *Sad Fortunes* で多かれ少なかれ作者のその後の全作品を貫いているそのテーマへの巧みな導入が成された後、15年余り後に書かれた *Middlemarch* で更にそれぞれの役割が追求され深化されて完璧に開花したものと

見ることができる。*Middlemarch* では Lydgate が money scandal に取り込まれた時、生活苦のため Bulstrode から大金を借りていたのだし Bulstrode の過去がそれまでの rumor や gossip で示唆されたように次々と明らかになる中で自分に向けられた bribe の嫌疑に対してその負い目故にそれから全く潔白であったという自信は彼にはない。Rosemaria Bodenheimer はそのような *Middlemarch* の gossip や scandal の特性について、「常に抑圧された真実 (depressed truth) の外面化⁴¹⁾」であるとしているが *The Sad Fortunes* での gossip や scandal はまだそこまでの意義は与えられてはいない。それは George Eliot が、*The Sad Fortunes* を書いた時の彼女の置かれていた社会的な立場と、*Middlemarch* を書いたそれから 15 年余り後の小説家としても社会人としても円熟した境地にあった彼女の立場からくる差異によるものであろう。

つまり George Eliot は、当論文の I と II で見たように妻子ある Lewis と外国で共同生活に入っただ後 1855 年に 8 か月ぶりに共に英国に帰還したのであったが、そこで 2 人を待っていたのは彼らの非合法的な結婚に対して起った嘲笑と社会的な追放であった。しかし Lewis との生活の中で得た「人と人との密接なかかわりの中から湧き上がる喜怒哀楽の情⁴²⁾」は Lewis の強い勧めと相まって *The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton* の創作の動力を彼女に与えたのであった。「世間は男性には寛容で Lewis の社会復帰は早かったが、彼女は厳しく拒絶され、二人揃って招待されることは全くなく隠遁生活を余儀なくされた⁴³⁾」状態の中で目の前に展開している自分とその属する community との葛藤に目を据えながら彼女はひたすら *The Sad Fortunes* の小説の執筆に励んだのであった。*Middlemarch* 中の Bulstrode や Lydgate が被った gossip や rumor や scandal に比べて *The Sad Fortunes* 中の Barton 牧師や伯爵夫人に向けられたそれらが、幾分茶番めいているのは当時彼女自身がそのような gossip や scandal のまさにその渦中であってそれらを主観の中でとらえざるを得なかったという事情によるものであったのであり、それから 15～16 年後、そうした自分の置かれている社会的な立場が改善されて完全な社会復帰が成された中で書かれた *Middlemarch* においてはそうした gossip, rumor そして scandal の扱いにその試練をくぐり抜けた者としての確固たる客観的な姿勢が形成されているのを見るのである。*Middlemarch* で Bulstrode と Lydgate の scandal について作者が

この事件はとても社会的な事件であり、かつまた重要な事件であったのでその興味を満足させるために晩餐会を催す必要があった。……多くの人たちが食事に招いたり招かれたりしたのである。……いつもよりしばしばお茶によばれていったのである。Green Dragon から Drop の店にいたるすべての公共の酒の席における興味は、上院が選挙法改正法案を否決するかどうかという問題に向けられる興味の比ではなかった⁴³⁾

と言っているようにそうした evil speaking は、1830 年前後のイギリスの local community にあってはどんな社会現象にも優先するものであると作者は考える。それはまた、産業革命による近代化の波が押し寄せる以前の、血縁、地縁で互いが有機的に強く結びついているその結束の崩壊を恐れる community の住民がその恐れを発露として編み出した自己防衛の知恵であったと見ることのできるものである。つまり George Eliot が小説執筆において目ざしていた人間の pathos

と humor、それから sympathy と generosity を描き出すためには、彼らが属する community を展開するのが必要であったのであり、それは gossip, rumor, scandal という具体的なものとなってそこに顕現されるのである。

(2006 年 9 月 10 日 完)

注

- (1) 2005 年 1 月：『George Eliot の小説における gossip, rumor の働きについて(3)』
- (2) 紀要第二十九号 2006 年 1 月刊
- (3) 紀要第二十八号 2005 年 1 月刊
- (4) *Daniel Deronda*；1876 年 大作 *Middlemarch* の後の George Eliot 最後の作品
- (5) 共同体；共同社会 ドイツの社会学者テニエス (1855-1936) が唱えた社会類型の一。血縁に基づく家族、地縁に基づく村落、友情に基づく都市などのように人間に本来携わる本質意思によって結合した有機的統一体としての社会。Gemeinschaft。
- (6) それを裏付ける言葉として George Eliot は *Felix idolt* の chap. 3 で “There is no private life which has not been determined by a public life.” と述べている。
- (7) Comte (1798-1857)；Auguste Comte, フランスの思想家。社会学の創始者とされる。著「実証精神論」「実証哲学講義」など。
- (8) *Middlemarch* については『Dorothea の, Mr. Casaubon との結婚における過ちについて』
当学紀要 18号：1995年3月
 〃 19号：1996年3月
 〃 20号：1997年3月
と更に『Lydgate の人生における理想の挫折について』
当学紀要 22号：1999年3月
 〃 23号：2000年3月
 〃 24号：2001年3月
とにおいて詳しく論じている。
- (9) 当学紀要 29号
- (10) “depressed truth”：Rosemarie Bodenheimer は彼女の著書である *Mary Ann Evans* の中で “For gossip in *Middlemarch* is always the externalization of a depressed truth.” と言っている。
- (11) 当学紀要 28号；2005年1月
- (12) 同上
- (13) *The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton* by George Eliot, chap. 2
- (14) 同上 29号
- (15) 同上, chap. 4
- (16) 同上, chap. 3
- (17) 当学紀要 29号
- (18) *Adam Bede* by George Eliot, chap. 37
- (19) もと五等爵 (公・候・伯・子・男) の第3位。
- (20) *The Sad Fortunes*, chap. 4

- (21) Ibid, chap. 4
- (22) 当時の社会の貧民層を形成する労働者の賃金の上限が年 50 pounds であったことから判断しても gentry 階級に属しているとはいえ Barton 牧師の年収の安さは驚くほどのものである。
- (23) 階級制度の中では地主や教区牧師、そして 5 等爵の貴族で構成される最高位の階級
- (24)(25) Ibid, chap. 5, an inmate whose presence kept the wolf from the door. の中の wolf というのは極貧の厳しさを指すものと思われる。
- (26) Ibid, chap. 5
- (27) Ibid, chap. 5
- (28) Ibid, chap. 2 Milly は伯爵夫人のひどい gossip について “Dear me! why will people take so much pains to find out evil about others.” と言っている。
- (29) Ibid, chap. 6
- (30) vicarage : vicar (rector : 英国国教会教区牧師の職務を代行した牧師) の住宅、牧師館
- (31) curate ; 英国国教会における、rector, vicar の更に補佐役
- (32) Gospel ; 福音, キリストとその使徒達の教え, 主として救世主の到来, 贖罪による救い, 神の国についての教え。
福音書 ; 新約聖書の最初の 4 書 ; Matthew, Mark, Luke, John, またはその一つ。
- (33) *Janet's Repentance ; The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton* と同時代の Milby の町を背景にした小説。弁護士 Dempster が率いる Crewe 牧師の教区民が新しくその町に入りこんできた Evangelical の Tryan 牧師を排斥する運動を起こすが、結局 Tryan が Dempster の妻の精神的な危機を救うことになる小説。
- (34) 当論文の(2) (当学紀要 27 号 ; 2004 年 1 月) で見たように George Eliot は 1854 年 7 月妻子ある Lewis と共同生活を始めドイツへと旅立ったのであったが、その 8 ヶ月後の 1855 年 3 月英国に帰還する。しかしそこで二人を待っていたのは嘲笑と社会的追放であった。しかし世間は男性には寛容で、Lewis の社会復帰は早かったが、二人揃って招待されることはなく、彼女は語り合う友もなく隠遁生活を余儀なくされた。そうした状況のさ中においてこの小説の執筆は成されたのであった。
- (35) 当注の(30)参照。
- (36) 当注の(28)参照。
- (37) Nemesis ; ギリシャ神話で人間の思い上がりに対する神の怒りと罰とを擬人化した女神
- (38) 当論文注(23)参照。
- (39) Ibid, chap. 7 Slander may be defeated by equanimity. 「中傷はほっとけば治まるものだ」
- (40) MDM, chap. 13
- (41) 当学紀要 24 号 *Middlemarch* II . Lydgate の人生における理想の挫折について(3) (2001 年 3 月)
- (42) 「ダニエルデロンダ I」 解説 (富田成子) (株) 日本教育センター 1987 年 竹之内明子訳
- (43) MDM, chap. 71